

おわりに

学問や研究の世界にも流行り言葉というものがある。共生も現時点では、その種の言葉の1つだといえるだろう。人間社会を論じる際に流行り言葉を用いることには、書き手の言わんとするところが読み手に伝わりやすいという一面のメリットがある。専門用語が意味するところを日常語の水準で理解し合うことができるからだ。しかし反面、書き手自身がその言葉の含意を十分に把握しないまま話ができってしまうというデメリットもある。理想や理念を語ろうとする流行り言葉の場合は特にそうだ。なぜそれが望ましいのかを書き手自身が実際には考えることなく、ただ外から与えられたその望ましさの達成度合いを論じることがたびたび生じてしまう。

本書では共生という言葉を扱うに当たって、そうした危うさについてまず意識的であろうとした。共生が流行り言葉ともいえるものであるからこそ、それがなぜ望ましいのか、誰がそれを唱えているのか、その意味を我々自身はどう考えているのかといった諸点について、常に問いながらこの本の各章を著すことを心がけた。大学や大学院の授業でも共生の理念・概念を用いて講義がなされたり、討論が促されたりする機会が増えている。そのような場で用いられる共生が何を意味するのかを確認し合うために、本書の執筆者は集うことになったのである。

幸いにして、教育学を構成する諸分野は極めて多岐にわたる。人と人との対面的な関係を分析する分野から人類全体の知性や理性を検討する分野まで、また認識論を用意する分野から政策提言を行う分野まで、多くの領域が存在している。そして現在、それらの諸分野でそれぞれに、共生という言葉が重要な意味を与えられているのである。本書を企画するに当たっては、まず共生に関するそれらの意味を整理していくことを行った。さらに、共生が含意する意味の近いもの同士を組み合わせて各パートを組織していった。その結果として本書は、連字符教育学が相互に乗り入れ絡み合いながら各パートを構成する形を得たのである。

共生を、たとえば「理念」と捉えるか、「概念」と捉えるか、それとも「思想」と捉えるかによって、論法や結論の性質も変わってくることを見出すことができたのは、第1部の論考が並んだことの成果である。同様に第2部では、人間の相互関係について、その関係のあり方自体を規定する力を検討しようとする共通の足場を得た。

第3部から第4部にかけては、人間がつくり出した制度である学校を、また人間の教育行為がつくり出した社会それ自体を、共生の場として捉え直す作業を行った。そこに見出される可能性と課題は現象としては様ざまだが、共生の場の構築に当たって共通する要素をもっているといえる。最後に第5部では、これも人間の政治的・経済的・社会的活動の所産である国家や国民という制度に関して、世界の様ざまな場所において同じような、変容や修正の動きが生じていることを検討するに至った。

これらは、制度化された学問上の作業区分をそのままには採用しなかったことでもたらされた知見であり、その意味で、共生を起点とした思考の産物だといえる。章ごとに力点の異なる多様な希望が論じられたところにも、共生を主題にした書物ならではの性格が表現されたといえよう。

また本書全体ではさらに大きく、「プロセスとしての共生」を描く統一的な観点を採用することができた。各章に示された多様な「プロセス」は共生の問題群の布置を示しており、問題の各段階において教育が現に何を成しているのか、今後何を成しうるのかを示唆するものとなった。

もちろん、共生をプロセス志向の概念と捉えるか、それともゴール志向の概念と捉えるかは、本書の中でも議論された通り、それ自体が論理の対立点となる。しかし教育が関わるもろもろの現象はすでに常に進行しているのであり、それを共生の理念に照らして記述することで、現状から見開かれる可能性を指差すことはできたのではないかと自負したい。また他方、共生をプロセスとしてだけ捉え、そのそもその目的や価値に無自覚になることを戒める主張も、本書の中では十分に展開されたものと思う。本書においてもやはり、教育の作用が共生に寄与するとする信念は前提とされているのであり、その信念は常に我々自身が意識し、また自ら省察していく必要がある。

その意味でも、共生という課題に様々な形で関わる人びととの討議が今後も継続されるための燃料として、本書が存在することを願いたい。共生について考えることが、教育や人間や社会について考えるための1つの回路として機能するようになれば、そのときにこの言葉もただの流行り言葉ではないものとなるのだろう。

最後に、本書がそのように存在するための機会を与えていただいた筑波大学出版会の先生方に、深く感謝申し上げる。

岡 本 智 周